

(様式2)

令和5年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学校名	校長名
40	川崎市立 東住吉 小学校	片山 純子

学校教育目標	今年度の重点目標
す…すなおな子 (自分の良さに気付き自己肯定感を育む) こ…こころやさしい子(認め合い励まし合い高め合う) や…やる気がある子(主体的に粘り強く取り組む) か…かながえる子 (自ら課題を見つけ考える)	①一人一人を大切に、多様性を受け止める支援教育の充実 ②「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善 ③「なるほど！もっと知りたい！やってみたい！～誰ひとり取り残さないTSK～」を研究テーマに特別支援教育の研究に取り組む(令和4, 5年度研究推進校) ④特別活動を大切にした学年・学級経営の充実 ⑤人間としての在り方や生き方の軸をつくる

評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策
1 学校教育目標	めざす子どもの姿を全教職員で共通理解し、学校教育目標の具現化に向けた教育活動に取り組んだ。様々な場面から見えてくる児童の課題を明らかにして、すべての活動が目標につながるようにした。本校のシンボルツリーのけやきの木に目標を表した。	児童の実態から、長所と課題を明らかにして、目指す具体的な子ども像を示した。4つの目標を育成すべき3つの資質・能力に結びつけ、すべての教育活動に学校教育目標を意識できるようにした。一つ一つの活動については、丁寧に振り返りを行ってきているが、目標の具現化という点についての振り返りはまだ不十分な点もある。子どもの評価についてもあいまいで主観的な部分がある。	学校教育目標の具現化にむけた教育活動が行われているか、子ども達の姿は、目標に近づいているか、評価、振り返りを丁寧にやっているか、子どもの成長や変化に応じて、具体的な目指す子ども像の見直しも実施する。評価の在り方についても共通理解をもつ。
2 教育課程	教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てる。特に、生活科・総合的な学習の時間、特別活動、キャリア在り方生き方教育については、研究と関連して実施状況を評価し、改善を図った。本校ならではの特色ある授業の創造にチャレンジし、柔軟に計画をたてた。昨年度で作成した特別支援学級における5学級の教育課程も見直しを行い、今年度のクラス編成に合わせたカリキュラムを作成した。	工夫やアイデアを生かした特色ある様々な学習活動を実施することができた。外部ゲストティーチャーによる授業も積極的に行った。児童、教職員共に達成感や充実感を得ることができ、大きな学びにつながった。自治的な能力や自主的な態度を育てることには課題も残るが、学力向上の基盤に必要な人間関係づくり、コミュニケーション能力の育成のため全教職員が協力して取り組むことができた。	特別活動の目的や内容を明確にし、児童に自治的、自主的な力をつけ、一人一人が活躍できる場を増やす。児童の探求心を大切にした授業や体験学習を各学年の教育課程の中に組み込み、児童と教職員の学びが深められるようにする。学級活動(1)(2)(3)についての目標や指導内容を明らかにして、計画的な学級活動を実施していく。
3 支援教育	推進校としての研究と絡めて、「誰ひとり取り残さない」という理念について全教職員が共有した。教職員のつながりが深まり、協力して問題を解決できるようになった。一人一人の教育的ニーズを明らかにし、基礎的環境整備と合理的配慮、すべての児童が安心して過ごせる環境づくりや学びのユニバーサルデザインを推進した。いじめ防止基本方針に基づき、いじめの早期発見、早期対策を図った。	児童支援に関わる課題や問題をCoに集約するようにし、Coが中心となって支援体制の充実を図った。担任、Co、管理職との連携を密にし、児童のトラブルについては、報告・連絡・相談をスピーディーに行い、早期解決につなげた。必要に応じて、外部機関とも連携して解決策を考えた。チームで指導・支援にあたるのが定着した。	支援教育がすべての教育活動の基礎にあるということ、学校の中のたった一人の児童の問題にも、全教職員がそれに向き合い解決していこうという思いがもてるような意識を育てたい。温かで受容的なクラスづくりを心掛けるようにする。担任や学年、学校が問題や課題を抱え込まず、チームで助け合い、取り組んでいく姿勢をもつ。

4	特別支援教育 (特別支援学級)	研究の柱の一つである3次支援の特別支援学級の在り方について研究に取り組んだ。昨年度に引き続き、5学級のクラス編成、教室環境の整備を行い、クラス担任が教科等の授業を実施した。交流級との交流は、どの教科でどのような目的のために実施するかを明らかにして、指導と評価の一体化を図った。サポートノート、自立活動計画、のびゆくすがたの作成にも取り組んだ。	「これからの川崎市における特別支援学級の在り方の探求」についての研究が認められ、教職員組織表彰を受賞した。児童が情緒面で安定し、落ち着いて学校生活を送れるようになり、結果的に学力が向上した。一人一人の教育的ニーズが明らかになったことで教師の授業改善にも結びついた。学校全体でもその取り組みについて学び、通常の学級における特別支援教育の在り方(一次支援・二次支援)について研究を広げることができた。	2年間の研究で終わりにせず、これからも学校全体で取り組む姿勢を大切にする。一次支援、二次支援の在り方や授業づくりも校内研究と関連付けて推進していく。支援級では引き続き、クラスや教育課程の編成の見直し、学級・環境づくり等、学川崎市のこれからの特別支援学級の在り方についてモデルとなることができるようにすると共に、研究の成果を広げていく取り組みを積極的に進める。
5	教科等指導 校内研究	研究・研修による教職員の授業力・指導力の向上をめざした。特別支援教育の観点や視点を取り入れた生活科・総合的な学習の時間の授業研究を通して、主体的・協働的に探究活動に取り組む子どもの育成を目指した。研修や授業研究を計画的に進め、積極的に外部講師から指導・助言を受けた。 日常的な職務を通して、必要な知識や技能を高めていけるように、交換授業や授業参観等学び合いを推進した。	推進校としての2年間の研究の成果を伝える報告会を実施した。特別支援教育の研究がインクルーシブ教育の実現と令和の日本型学校教育に結びつけることができた。研究を通して、教師の学ぶ姿勢や意欲が育ち教職員同士の結びつきが深まった。「主体的・対話的で深い学び」「子ども主体の学び」とはどのような授業の在り方なのかについては共通理解ができていない。運営組織に位置づけた部会を機能させ、各教科等ごとにカリキュラムの見直しや授業提案は、まだ不十分であった。	主体的に学びあいができる授業の在り方を考えていく。新学習指導要領の各教科等の指導の在り方については、今後も研修が必要である。育成すべき資質・能力の柱をふまえて、授業を見直しをしていく。外部講師から学ぶと共に、校内での学び合いも行っていく。外部の研修で学んだことはフィードバックし、全員で共有できるようにする。「子ども主体の学び(UDL)」については、令和の日本型学校教育と結び付けて、校内研究としてチャレンジしたい。
6	学年・学級経営	すべての児童が安心して過ごせる自分の居場所のある環境づくり、授業づくりを基盤に、温かで受容的な学年・学級経営を目指した。学校教育目標を意識した学年目標の設定と、担任一人一人が学級の実態をとらえてクラスの目標を考え、目標達成のための学級経営ができるようにした。特別活動の学習や日常の指導を通して、望ましい人間関係の育成に努めた。	児童の興味や関心が広がる経験や体験を大切にしながら教育活動を積極的に実施し、その中で自治的な能力や主体的な態度を育てることに努めた。支援が必要な児童の実態把握のために、Co.や通級指導教室等との連携や相談も大切にし、課題や問題を担任や学年で抱え込まず、学校全体のこととしてチームで解決に当たった。	学級・学年の課題は学校全体の課題ととらえ、今後も教職員のつながり、チーム力を生かしていく。校務分掌上のそれぞれの役割がより活性化するように努める。小さなことでも報告・連絡・相談を大切にし、様々な課題や問題を共有して解決にあたるようにする。SDGsを意識したキャリア在り方生き方教育、人権尊重教育教育活動に取り組み、児童がよりよい学校づくりに参画し協力して活動しようとする学年・学級経営を目指す。
7	保護者・地域との 連携	来訪者が「また来なくなる学校」を目指した。学校、学年や学級の経営方針や児童の様子が保護者や地域に理解されるように努めた。学校だよりや学校掲示板の充実を努めた。外部講師と連携し、特色ある学校教育活動を積極的に実施した。 PTA役員と共に、相談を重ねながらPTA活動としてできることを考えた。	保護者や地域の方に講師になってもらうなどして、東住吉小学校ならではの特色ある教育活動に取り組むことができた。授業参観や学習発表会にはたくさんの保護者、地域の方の来校があった。PTA役員とは連絡を取り合い、できる活動を共に考えた。書面やメール等で積極的な情報発信に努めた。	保護者、地域の方と連携した特色ある教育活動を創造していく。そのために、積極的に活動の様子を伝えていくことに努める。来年度も自主的に活動できる東住PTAを作っていきたいと考えている。学校での取り組みや児童の様子については、HPを充実させるなどして、更に積極的に情報発信を行う。
8	健康・安全	日頃から養護教諭と連携して健康安全教育を推進し、教職員間の共通理解を図った。様々な健康や安全面等の問題について、学校・家庭・地域が協力して、適切に対処し児童の安全管理に努めた。学校防災計画の見直しを行った。多様な設定での避難訓練の充実を図った。	健康安全面では、家庭の協力が得られやすく、遅刻や行き渋りの児童も少ない。基本的な生活習慣が身につけている。教頭や養護教諭と毎日の欠席状況、病気やけがの状態を確認することを忘れずに行い、児童の健康安全面に配慮する姿勢を大切にされた。保護者対応も丁寧に行った。	養護教諭や栄養士による健康や食育に関する授業を教育課程の中に位置づけ、計画的に実施する。保護者との連携による感染症予防やアレルギー対応について教職員間で共通理解をもって実施していく。児童や教職員が安心・安全に過ごすことのできる教育環境を整える。

学校関係者の評価	今年度の学校運営のまとめ・次年度へ向けて
----------	----------------------

・学校全体として行っている支援教育の素晴らしさを感じました。3次支援システムを教職員で共有し、1次支援から大切に行っていて、誰ひとり取り残さないという姿勢を感じました。校内を体制を作って支援教育を推進していて素晴らしいと思いました。支援教育の大切さをぜひ広めていってほしいと思いました。

・研究を進めながら皆さんで確認し、視点を持って取り組んでいるのが素晴らしいと思いました。報告の内容が具体的で、しっかりと授業を行っていることが伝わりました。児童の成長と職員の達成感が感じられ、幸せな気持ちになりました。

・これからは学校教育の在り方が変わっていかねばならないと感じました。従来通りではなく、子どもの主体的な学びを重視することが大切だと感じます。

・学校全体が一丸となって取りくまれていることを感じました。先生方の雰囲気が穏やかで、多くのお子さんが安心できる環境だと思いました。

・先生方の仲の良さを実感しました。研究の成果は先生方の雰囲気の温かさだと思います。

・支援級だけでなく、学校全体で特別支援教育を特別扱いせず、当たり前にな様な支援を取り入れていることに感激しました。

個性的で多様な教職員集団が、チームとして学校教育目標の実現という同じゴールを目指して仕事に向き合うことができた。児童や学級について情報交換を密に行い、協力・協働して問題や課題の解決に当たることができた。教職員のつながりが深まった。柔軟な発想で意欲的に新しいことにもチャレンジしようとする姿も見られた。若手やミドルリーダーの育成は課題であるが、個々の教師を指導するだけでなく、互いに学び合い助け合える教師集団に成長した。目指す子どもの姿に迫れるように、教育課程のさらなる見直しを行い、カリキュラム・マネジメントの充実を図っていく。新しい時代に必要となる資質・能力の育成については、これからも日々の授業や、研修、授業研究を大事にして、授業力の向上を図る必要がある。ゴールを見失わないようにして、児童や教職員が楽しく学びにつながる、そして一緒に取り組めてよかったと振り返ることのできる学習活動を考えていきたい。「子ども主体の学び・UDL」については研究としてチャレンジしてほしい。支援教育については、引き続き学校経営の大切な柱とする。一人一人の教育的ニーズは多岐にわたり多様な支援や指導が必要である。問題や課題を常にキャッチできるようにしていくことが必要である。教職員も問題を一人で抱え込むことがないようにしていきたい。

来年度もひらかれた学校、ひらかれた校長室、また来々となる学校を目指し、教職員や保護者の様々な意見や思い、要望に真摯に耳を傾けられる姿勢を大切にしたい学校運営を行ってきたい。